東北大学東北アジア研究センター ニューズレター

CNEAS

newsletter

Center for Northeast Asian Studies

96

2023
Spring

巻頭言

クレムリンの「ナチ」

寺山恭輔（教授）

2020年2～3月、パンデミックが猛威を振るいだした微妙な時期に、約1ヶ月モスクワで過ごしたが、そのときに発掘した史料をもとにした論考を最新の『東北アジア研究』27号に掲載することができた。スターリンの東方政策に関する文書で、筆者が将来的に想定している全体像を描くには欠かせない大きなピースとなるものである。活字になってしまうと想像しにくいが、手書き文書や写りの悪いマイクロフィルム画像と格闘した成果であり、執筆にはそれなりに膨大な時間を費やした。この訪問時、当初予定していた公文書館が使えず、しかたなく立ち寄った別の公文書館で見つけたお宝だった。その後3年間、そして今後も当分はロシアへ史料探しに行けそうにないことを考えると運が良かった。長年お世話になっているロシアの先生には、問い合わせた不明箇所についてその都度丁寧に教えていただいた。しかし新しい史料を閲覧できない状態が続くと、弾切れでオリジナルな論考を発表できなくなるだろう。

それはともかく、20世紀前半のソ連の独裁者が現在の筆者のテーマだとすれば、もちろんこの一年間、21世紀に出現した同じ国の別の独裁者プーチンによるウクライナへの侵略戦争が気にならないはずがない。罪もない多数の一般市民が連日虐殺され続けている事態に心が痛み、怒りしかわいてこない。ロシア研究者が現地に行けず不便を被るといった瑣末な問題を飛び越え、エネルギー高騰に起因するインフレや食料問題等、世界の圧倒的多数が迷惑を被っている。ネオナチの弾圧からロシア系住民を救うとのデタラメをまき散らすクレムリンの本物の「ナチ」と、彼が作り上げた体制を排除しない限り、この戦争は終わらないし世界平和も訪れない、ということがますますはっきりしてきた。

西側による支援が効果的なのは間違いないが、多数の犠牲者を出しながら8年以上続く戦争の間に築き上げられた強固な軍事組織の賜物か、ウクライナ軍の奮闘ぶりは称賛に値する。一方、すでに約20万人の犠牲者（general SVR）を出しながら、粗末な装備、武器を手に、黙って死地に赴くロシア兵の多さには愕然とさせられる。20年以上フェーク情報で洗脳され、閉ざされた言論空間にいるので仕方ないのだろうか？はるかに豊富な情報にアクセスできるのに、時々メディアを騒がせる日本の愚かなプーチン応援団にも驚くが、プロパガンダの威力を改めて認識せざるを得ない。

冷戦が終結し、日本海を挟んで日本の西北に位置するユーラシア大陸に開かれた未来について将来を構想すべく設立された当研究センターだったが、四半世紀経過した今、その研究対象は、国際法を堂々と無視する独裁者を擁する核保有三か国と対峙する、世界で最も危険な地域になったことを改めて認識しなおす必要があろう。そしてプーチニズムを理解するには、スターリニズム研究も何らかの役に立つはずである。

contents

1 巻頭言
2 定年退職にあたって
3 コラム：フィンランドでの学術交流とウクライナ戦争
4 新任ごあいさつ
受賞・成果のニュース
5 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
著書・論文紹介
8 活動風景

TOHOKU UNIVERSITY

Essay

定年退職にあたって

瀬川昌久
中国研究分野（教授）

せがわ・まさひさ●東京大学教養学部教養学科卒業、同大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学、学術博士。国立民族学博物館助手、東北大学教養部助教授、文学部助教授を経て、1996年より現職。専門は文化人類学、主なフィールドは中国南部、主要テーマは親族、エスニシティー。

広瀬川（瀬川昌久画、水彩画）

毎日通勤のたびに、私は牛越橋という橋をわたる。下を流れているのは、仙台を代表する河川・広瀬川だ。川内キャンパスのある高台の下を回り、仙台の市街地を縁取るようにゆっくりと蛇行して、評定河原、米ヶ袋方面へと流れている。

私は31歳で東北大学教養部に赴任するまで、仙台はほんの数回しか訪れたことがなかった。だが、もとをたどれば母の実家は仙台藩士の家系で、母は女学校時代を仙台で過ごしている。当時、母の一家は米ヶ袋の故・西澤潤一先生宅のはす向かいに住んでおり、女学生の母は、毎日のように広瀬川の河原に降りては珪化木の上に腰を下ろして読書にふけっていたという。それ故、私は広瀬川を眺めるたびに、自分が東北大学に職を得たことに不思議な縁を感ぜずにはいられない。

私が東北大学教養部に助教授として赴任したのは、平成元年4月のことであった。当時、地下鉄南北線はできたばかり、また着任の日は仙台が政令指定都市になった正にその日だった。以来、気づいてみれば平成はまるごと過ぎ、令和の世へと移り変わった。今ではもう、私の初任部局である教養部のことや、1996年の東北アジア研究センター発足当時の状況を知る者が学内にほとんどいないことを思うと、あらためて隔世の感を覚える。

この間を振り返れば、実に楽しい、幸せな研究者人生だった。何の誇張も見栄も忖度もなしに、そのように思う。大学教員の本務は当然ながら学生の教育にあるのだが、東北アジア研究センターは研究組織なので、教育に関する負担は軽く、自分の研究に専念できるという点で大変恵まれた環境であった。もちろん、協力講座教員として担当する大学院教育や、2007年から2年間担当したセンター長の職務など、研究以外の役割も果たしては来たが、全体としてみれば自分の好きな研究に没頭できるすばらしい日々だったと思っている。

私の専門分野である文化人類学は、もともとは動物の一種としてのヒトを研究する人類学という理系分野から派生したものではあるが、文化の研究に特化することによって、コアな人文学に近い性質を帯びるようになった。学問には、物事を数値に還元して数学の合理性によって分析を行うものと、専ら言葉による記述・分析を通じ、言語のもつ論理性によって物事を解釈しようとするものの2種類があるが、文化人類学は明らかに後者に属する。それは、文化人類学が主に異文化をもつ人々を対象として、その行動や言説をじっくり観察し、事象を文脈付きの全体として理解しようとすることから来るものである。

そのため、文化人類学者の多くは、フィールドワークによって対象地域の文化・社会について直接観察し、綿密に記述・分析してゆく手法をとる。そして、それを通じて人間の文化とは、社会とは、という根元的な問いに答えを見出すことを目的としている。私も、香港や中国南部の広東省、海南省を中心に、フィールドワークを実施しながら、中国人の家族・親族関係や、地方文化の相違に基づくわれわれ意識の生成・変成などについて主に研究してきた。ただし、中国や中国人を理解することが究極の目的だとは思っていない。あくまで、人間の社会とは、文化とは何かということを、中国という一つの覗き窓を通じて理解しようとしているのだと考えている。いずれにせよ、私がそのような研究に携わってきた期間は、大学院生時代から数えれば既に40年以上となり、これまでに出した学術書は単著だけでも10冊を超える。

最近の大学では、業績評価が声高に叫ばれるようになった。これは、大学の研究者といえども公共の財源を基にして禄を食んでいるからには当然のことであろう。ただ、学術研究、特に文系のそれは、即効的な「成果」とはほど遠い、長期的な積み重ねの営みであることが多い。だから「この一年で何本論文を書いた」とか「何回他人に引用された」などの数値だけでは、その真価が計り得ないものも少なくない。私の携わってきた文化人類学の研究もそうしたものだと思っており、その点で私の研究の価値は、今後50年、100年の研究史を通じてこそ評価されるべきものと密かに自負している。

若いうちは、すぐに人に認められる成果を生むことばかり求めがちであったが、年を追うごとに、真に自分の興味と学問的良心に照らして納得できる研究だけをしたいと思うようになった。同時に、これまでほぼそれが実践してこれたのも、周囲のさまざまな人々の導きや助力によるものであると感じ、そのことに深い感謝の念を覚えるようになった。このような私の研究者としての半生についての述懐は、先日、『十月の梧葉―研究者としての半生を振り返る』と題するエッセイ集として上梓したので、興味のある方は一読されたい。

仙台も都市化が進み、広瀬川の川辺の風景は時代とともに移り変わったが、川の流れは今日も滔々と続いている。同じように、東北大学の研究と教育の営みは、今後も途絶えることなく続いてゆくことだろう。その悠久の流れに比べれば、私の過ごした34年の月日などは、ほんの一瞬でしかないであろうが、それでも、そのたゆみのない流れの中に身をおくことができたことを、今は大変誇らしく思っている。

COLUMN

フィンランドでの学術交流とウクライナ戦争

高倉浩樹　ロシア・シベリア研究分野（教授）

2022年9月から12月初旬までフィンランドに滞在した。ラップランド大学北極センターで客員教授を務めることになったからである。招へい者は、ステムラーフロリアン（Florian Stammler）教授である。彼とは1999年以来交流を続けてきており、共にシベリア人類学を探究する研究仲間・友人である。東北アジア研究センターに客員教授として滞在したこともある。

フィンランドでの仕事の一つは、彼とともに進めている北極人類史におけるドメスティケーションの理論化を進めることであり、これに関わる学術論文集の編集を進めことであった。その成果の一部はラップランド大学での特別講義「Hunter-gatherer and inequality: Unthinking the domestication in human history」（2022年11月17日）として報告した。論文集は出版企画をイギリスの出版社 Routledge から得ている。寄稿者からの論文を査読に回したり、改訂原稿の確認をしたりしながら、2023年には出版できるめどをつけることができた。

北極センターは、人類史・気候変動・多文化共生などの課題に取り組む文理融合型の地域研究の研究所である。ロシアでの調査・観測を行っている研究者はかなり多い。プロジェクトとしてロシア人の研究者を雇用しているチームもある。それゆえに、2022年2月から始まったウクライナ戦争は、この組織の研究事業そのものに大きな影響を及ぼしていた。

フィンランドでは政府および多くの大学が、公的資金をつかったロシアとの共同研究を一切禁止している。訪問・派遣は不可能であり、ある大学では大学公式メールを用いたロシアとの交流すら禁じるという徹底ぶりである。このあり方をめぐっては、二つの異なる対応があった。第一に、ソ連崩壊以降に構築された環北極海諸国間の国際協調体制は、修復不可能なレベルで破壊されており、「新冷戦」体制下での外交政策と科学研究が行われるべきというものである。第二は、政府と研究者・一般の人々は区別されるべきであり、ロシア側との共同研究あるいはロシアにおける調査・観測は継続すべきという考えである。前者を主張しているのは、法学や政治学などの分野であるのに対し、後者は人類学や地理学・気象学・雪氷学など現地調査を行う分野であるのが印象的だった。いずれにしても国家と科学の関係が厳しく問われており、人文学を含めた科学者は自らの立場を意識して対応が迫られていることを感じた。

こうした中で日本政府がロシアとの学術交流を制限はつけているものの禁止していないことはフィンランド研究者にとっては、驚きであるとともにまた希望でもあるようだった。「新冷戦」という言葉は日本ではむしろ対中国を念頭に使われていることも関係しているだろう。ロシアによるウクライナ侵略は激しく批判されるべきことである。とはいえ日露関係では、西欧・米国とも全く同じ立場ではありえず、独自の外交と科学政策が模索されるべきである。個人としてはロシアとりわけ東アジアに隣接するシベリアやロシア極東地方との学術交流の維持・発展こそが、長期的にみて日本を含む隣接地域の安定に寄与すると考えている。

フィンランド北部に位置するロバニエミ市でもウクライナからの避難民と接する機会があった。街中を歩いてもロシア語はわりと頻繁に聞こえてくるし、自治体やNGOが行う文化交流やフィン語サロンでは、そうした人々も多く参加していた。フィンランドを経由し別の国に移動していく場合もあるが、この国に滞在しようとする人々もいる。フィンランドは多文化共生政策として外国人の統合政策プログラムを充実させており、この点は日本との大きな違いを感じた。

2022年11月にラップランド大学北極センターと東北アジア研究センターで部局間協定を締結した。私が招聘されたことに加えて、上述のステムラー教授と、両組織の研究者交流プログラム「East Asia in the Arctic」を2021年から開始したためである。昨年度はコロナのためオンラインでのワークショップだけだったが、今年度は若手研究者の派遣と招聘が行われている。11月末から3週間、フィンランド側からポスドク研究員のアレマンルーカス（Lukas Alleman）さんとシコーラカロリーナ（Karolina Shikola）さんを仙台に招聘した。彼らにはセンターの客員研究員となってもらい、それぞれ、北欧とロシアにまたがる先住民サーミの歴史人類学、ロシア先住民コミ人の文化復興運動について研究を行った。その成果は、東北大のセミナーおよび北海道大学での国際シンポで発表してもらった。東北大からは環境科学研究科の博士課程に在籍する是澤櫻子さんが1月中旬から6週間、北極センターに滞在した。ロシアの先住民組織と運動を研究する彼女は、ウクライナ戦争以前まで存在したフィンランドとロシア間の先住民組織の協力について研究している。なお、この交流事業は2024年まで継続することになっており、ロバニエミと仙台の間の学術交流はますます盛んになろうとしている。

ラップランド大学北極センター。大学キャンパスでなく、市内に位置し、ロバニエミ市博物館も併設された建物に設置されている。

たかくら・ひろき　福島県出身。東北大学東北アジア研究センターロシア・シベリア研究分野教授、専攻は社会人類学。シベリア先住民の狩猟牧畜文化、気候変動による永久凍土融解の社会影響評価のほか、極北人類史や災害と文化について調査研究している。

李宥霆
客員准教授
（2022年12月1日～2023年2月28日）

り・ゆうてい ▶ 国立台湾大学工商管理学士、エジンバラ大学大学院比較文学修士、関西大学大学院文化交渉学博士。現在、国立台湾大学国家発展研究所准教授、教学発展センター主任補佐。

多元文化と思想のつながりを楽しむ

私は2011年ごろインドの詩聖タゴール（1861～1941）に関心を持ちました。彼は1913年にアジア初のノーベル賞受賞者になり、世界旅行の機会を得て、反帝国・反国家主義を叫び、東洋の精神文化を提唱しました。その経歴を通じてタゴールが20世紀初頭に多重の脈絡に関与し、各地で異なった反響を起こしました。したがって、タゴールを対象とすると人物研究に限らず、近代世界の一つの思潮を探求することができます。そして、近代西洋に由来する民族・国家・地域・世界という概念を再考するきっかけも得られます。

前述の研究から出発し、私はインド、中国、日本を中心に「近代アジアの思想変容とアイデンティティー形成」という問題意識を持つようになりました。20世紀初頭においてはインドが植民地、中国が列強に分割される名目上の独立国、日本が事実上の独立国だったという事態をみれば、この三国はある程度当時の非西洋世界を代表できるのではないかと考えています。現在タゴールに関する英語著書の出版を目指しながら、日本のアジア主義および明六社員をめぐる儒教の影響、そして思想課題としての中国観などさまざまなテーマにも力を入れています。

近代西洋を背景にアジア国家の思想変容と自他認識の比較を行い、そのつながりを見出そうとしている私は、今後も微視的・巨視的分析を並行させ、世界的視座における思想史研究を深めるつもりです。今回の訪問によりトランスディシプリナリー的な刺激を受け、さらに意識を向上させていきたいです。

受賞・成果のニュース

佐藤源之教授が第72回（令和4年度）河北文化賞を受賞

本センターの佐藤源之教授が2023年1月、第72回（令和4年度）河北文化賞を受賞した。河北文化賞は東北の学術、芸術、体育、産業、社会活動の各部門で顕著な業績を挙げ、東北の発展のために尽力した個人、団体に贈られる賞である。

佐藤教授は2008年の岩手・宮城内陸地震で発生した「荒砥沢地すべり崩落地」について宮城県栗原市と連携し地上設置型合成開口レーダ（GB-SAR）による崩落現場のモニタリング・早期警戒情報システムを構築、運用を行っている。GB-SARは高さ100m、幅900mにおよぶ広範囲な地すべり崩落面の変位をmm単位の精度で計測することが可能であり、運用開始から現在まで10年以上にわたり24時間体制で計測ならびに関係者への情報提供を続けている。

人道的地雷除去用地雷探知機「ALIS」トレーニングの様子（2023年1月 カンボジアにて）

2013年には東日本大震災からの復興に伴う住宅の高台移転において、埋蔵文化財調査を効率的に行うためアレイ型地中レーダ（GPR）「やくも」を開発したが、それを利用した津波被災者捜索活動を宮城県、福島県、岩手県の県警と協力して数年間にわたり実施した。

この地中レーダ技術を応用した人道的地雷除去用地雷探知機「ALIS」は2018年よりカンボジア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コロンビアへの導入が始まったが2023年1月からウクライナでの地雷除去活動を外務省、JICAと協力しながら開始した。今後の地雷被災国での活躍が期待される。

これらの社会貢献が大きく評価され、今回の受賞に至った。

REPORT 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか

資料展示

須賀川市立博物館テーマ展「内藤家文書にみる須賀川の江戸時代」

荒武賢一朗
（上廣歴史資料学研究部門／教授）

開催日 2022年10月25日～11月27日
会場 須賀川市立博物館（福島県須賀川市）

2019年度より須賀川市立博物館と共同で、当地に伝来する歴史資料調査を実施している。その成果は、毎年秋に同館テーマ展として紹介するよう努めてきた。今年度も「内藤家文書にみる須賀川の江戸時代」と題して、江戸時代に奥州街道の宿場として繁栄した須賀川町の歴史を主題に、行政文書・手紙・帳簿、そして肖像画など美術資料を公開することができた。内藤家は、伊勢国（現・三重県）の武士を先祖に持ち、戦国時代末期に須賀川町へ移住し、商業で成功を収め、江戸時代の領主（白河藩）から「代官加役（だいかんかやく）」という民政を担当する役職に任命される。このようなルーツを持つ内藤家の歴代当主は、町民たちの生活を守ることに力を注ぎ、飢饉の発生で困窮を極める人々の救済に奔走し、また赤子養育金という子どもたちが健やかに育つための基金を創設するなど、地域への多大な貢献を果たした。須賀川町は、これまでの研究で領主に行政運営を依存しない「自治都市」の性格が強いと評されており、その具体的な特徴を今回の展示で詳しく説明することができた。ご関心のある方は、開催期間中に配布した「別冊史の杜7号※」を御覧いただきたい。

須賀川市立博物館 展示室

※上廣歴史資料学研究部門ホームページにてPDF公開
https://uehiro-tohoku.net/survey/survey01

BOOKS
著書・論文紹介

RECENT PUBLICATIONS

イスラームと儒学 ―「回儒学」による文明の融合

アリム・トヘティ 著 明石書店 2022年10月刊

text: 志宝ありむとふて

中国イスラーム共同体の歴史的発展はアラブ人、テュルク人、中央アジアムスリム移民の変遷を通して成り立ってきた。明清王朝時代はムスリム共同体が数百年かけて現地化した時期であり、その意識及び文化思想発展のカギとなる時期であるといえる。この時期、中国ムスリムの学術界にはイスラーム学と儒学などに精通した多様な文化思想を持った思想家や学者が登場する。これらの知識人により、イスラーム思想を基礎としつつ、儒学、特に宋明儒学の影響を強く受けながら、新しい学説体系――「回儒学」が生み出された。本書では「回儒学」の更なる体系化研究を目的とした。

本文は主に「課題の提出及びその研究意義、課題に関係する研究、課題研究思考と過程」「『回儒学』の思想背景」「イスラーム思想と『回儒学』関係の研究」「儒家思想と『回儒学』関係の研究」「『回儒学』の思想体系」、最後に「『回儒学』思想体系及び特徴」という主題から論述を行い、なぜ「回儒学」を重視して研究を行ったか、論理展開に対する詳細な論証から「回儒学」思想の構成を行った。

「回儒学」学者の思想体系はイスラーム法学、イスラーム教義学、イスラーム哲学、倫理学、政治学などを基礎として、儒家思想の批評を吸収し、宋明儒学から創出されたものであり、世界イスラーム思想文化発展史への貢献だけでなく、文明の多様化にも貢献している。

BOOKS
著書・論文紹介

華南 ―広東・海南の文化的多様性とエスニシティー

瀬川昌久 著　風響社　2022年12月刊　　text: 瀬川昌久

本書は、著者がその主要な研究テーマの一つとして取り組んできた中国東南部の地域文化とエスニシティーについて、約30年間にわたる調査研究成果を集大成したものである。エスニシティーとは、人間集団間の文化的差異によって、互いに自他の区別意識が生じたり、それに基づいて多様な相互作用が生じたりする現象を総称する概念である。広東省、海南省等の中国東南部は、客家、広東人など漢族内部の多様な方言集団や、ヤオ、ショオ、リー等の少数民族がパッチワーク状に分布しており、文化的・社会的に著しい多様性が見られる点に特色がある。すなわち、果てしない平原の続く華北や、茫洋とした水郷地帯の広がる華中とは異なり、概して地形の複雑な華南では、一山越えて隣の川筋に至ると、異なる方言が話されていたり、祭祀される神祇の種類が異なっていたり、親族組織の発達の仕方が微妙に異なっていたりする。著者はそうした華南の多様な地域文化をもつ集団それぞれについて、多年にわたりフィールドワークを重ね、研究を行ってきた。本書では、その成果に基づき、多様性に満ちた華南地域の魅力と、そうした微細な文化の相違から生成されるさまざまな「われわれ意識」や社会的境界について分析し、同地が文化人類学のエスニシティー研究にとって極めて貴重なフィールドであることを提示している。なお、本書の概要は風響社のホームページ（http://www.fukyo.co.jp/）の人類学専刊のコーナーにて見ることができる。

東北アジア学術読本 9
東北アジアの自然と文化 2

東北大学東北アジア研究センター 編　東北大学出版会　2023年1月刊　　text: 後藤章夫

本書は2018年3月に発行された「東北アジア学術読本 7『東北アジアの自然と文化』」の続編で、東北アジア学術交流懇話会が刊行する『うしとら』に掲載された記事のうち、『東北アジアの自然と文化』に未収録だったものから厳選して編集された。I. 自然と環境、II. 社会・経済・政治、III. 歴史・言語・文化、IV. 史料調査の4章からなり、コラムも含め計36編の記事を収録する。最も古い記事は1999年の『うしとら』第2号に掲載されたもので、最も新しい記事は2020年の最終号（79・80合併号）に掲載されたものである。すなわち、本書には20年以上に渡る懇話会会員の研究活動が記されている。執筆から既に多くの月日が経った記事もあるため、転載許可を頂く際には、必要に応じて補遺を執筆していただくようにお願いした。現状に合わせて、加筆修正してくださった記事も少なくない。

本書の企画は、当時センター長であった高倉浩樹先生の「『うしとら』記事を基に東北アジア研究の教科書を作る」、という提案に端を発している。最終的には、論文や教科書には書けない研究の裏話も随所に出てくる『うしとら』らしさを維持することを優先し、軽微な追記や加筆修正にとどめたこともあり、あまり教科書っぽくない構成となった。それでも、東北アジアを舞台とした多様な研究を手軽に知ることのできる一冊になったのではないかと思う。本書が、東北アジア地域の自然と文化の理解を深める一助となれば幸いである。

仙台藩宿老後藤家文書 —由緒・職務・武芸—
（東北アジア研究センター叢書 72 号）

野本禎司、南郷古文書を読む会 編著　東北大学東北アジア研究センター　2023年1月刊　text: 野本禎司

本書は、江戸時代中頃から仙台藩の「宿老（しゅくろう）」に代々就任し、その役割を果たしてきた後藤家に伝来した古文書について、2019年度から進めてきた調査成果をまとめたものである。仙台藩伊達家譜代の家臣として、戦国時代には多くの武功をあげ、織田信長や徳川家康とのエピソードをもつ後藤家の由緒、支配機構の官僚化が進展するなかで世襲職であった「宿老」の職務、藩主への伝授もつとめた鉄砲討方をはじめとした武芸に着目し、それらの資料翻刻を多く掲載し、Ⅰ論考編、Ⅱ資料翻刻編、Ⅲ文書目録の三編に編集した。仙台藩研究において「宿老」はとくに未解明な部分が多く、後藤家文書はその解明に寄与するとともに、後藤家が知行地を与えられた不動堂要害（現宮城県美里町）周辺の地域史に貢献できる内容が含まれる。論考編には、野本が後藤家文書の概要を解説するほか、2020年10月から共同で文書解読してきた南郷古文書を読む会会員2名が執筆した後藤家の家の歴史に関わる論考、また美里町指定文化財「後藤の朱槍」の紹介文を掲載し、後藤家の菩提所である皎善寺をはじめ同地域の歴史・文化との関わりにおいても充実した内容となっている。上廣歴史資料学研究部門では、資料所蔵者、自治体、地域団体、研究者が密接な連携をとりながら歴史資料保全活動を展開することを意識しており、こうした研究活動の実践を東北アジア研究センター叢書として刊行できたことに感謝したい。

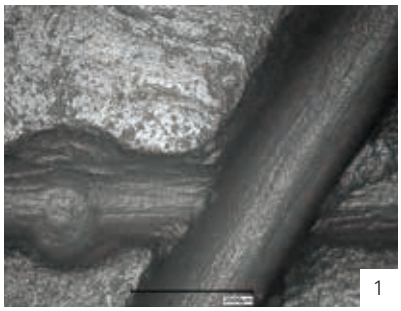
十月の梧葉 —研究者としての半生を振り返る

瀬川昌久 著　風響社　2023年2月刊　text: 瀬川昌久

本書は、著者が大学院生時代、国立民族学博物館助手時代、そして東北大学赴任以降、本年の定年退職に至るまでの間、文化人類学の一研究者として行ってきた研究や論考を自ら振り返るとともに、そうした学術的興味を生み育てる背景となった幼年時代の諸体験や、さまざまな人々との出会いについて回想したエッセイ集である。著者は、これまで中国の親族組織やエスニシティーを主要なテーマとして研究を行ってきたが、そうしたテーマへの興味を育むに至った過程を、両親から受けた教育、故郷の風土、恩師や同僚との出会い、香港新界や中国南部でのフィールドワークにおける経験など、さまざまなエピソードを交えて語っている。中国の親族組織・宗族に対する興味は、著者の幼年期以来の自分の祖先や家系に対する関心に淵源をもつものであり、また華南地域に分布する多様な文化集団への興味は、日本の東北地方出身者としての地方文化に対する感受性に発するものであることが明らかにされる。それと同時に、40年に及ぶ研究者としての半生を通じ、自分を支えてくれたすべての人々に対する深い感謝の念が述べられており、いわば著者の学術活動全体に対するエピローグとも言うべき一書となっている。なお、タイトルの「十月の梧葉」は、「少年老いやすく学成り難し」という有名な漢詩の一節にちなむものである。本書の概要は、風響社のホームページ（http://www.fukyo.co.jp/）の風響社あじあ選書のコーナーにて見ることができる。

デジタルマイクロスコープを使用した石製装身具の製作技術研究

久保山和佳
（ヒトと地球の相互作用の変遷史に関する研究ユニット／学術研究員）


1

私は中米南部に位置するコスタリカの考古学を専門とし、緑色岩製の石斧型ペンダントを対象に、製作技術の発展と拡散について研究している。当該ペンダントは、アイデンティティの異なる集団間で社会的紐帯を強化する遺物であり、その技術拡散は文化・世代間の人的交流を理解する上で重要な研究テーマであると位置付けられる。

石斧型ペンダントは、先史コスタリカにおいて首長制社会が形成された頃（500BC～AD900）の墓の副葬品として出土する。出土遺跡は、コスタリカ北西部のニコヤ半島から東部のカリブ海地域にかけて分布するが、遺跡によってペンダントの形態的・技術的特徴や石材種、埋葬方法は多様で、異なる葬送文化を持つ集団の存在が窺える。当該ペンダントは、ヒスイや蛇紋岩、石英、玉髄などの緑色岩から作られた磨製石斧を素材とし、ヒトやトリ、ネコ科動物などのモチーフが施される。当時の主要利器であった石斧は限られた地域で採取された希少な岩石を長時間研磨・加工して製作される。それを再加工して象徴的・機能的重要性を持たせた石斧型ペンダントは、労働投下量が極めて高い特別な装身具である。

石斧型ペンダントは1000年以上の長期間に渡って継続して利用されたにもかかわらず、その技術的発展過程が分かっていない。先行研究では、製作実験や詳細な遺物観察による実証的データに基づいた具体的な製作技術や加工前の斧の使用、装着方法の提言には至っていない。また、完成品の図像に重ねて半割や穿孔、切込みなどの再加工の痕跡が認められる場合もあるが、遺物研究と実験痕跡研究が未熟なため、個々のペンダントがどの様に使用され、再加工された後に埋納されたのかといったライフヒストリーは不明である。

現在私は東北アジア研究センターにおいて、これらのペンダントの形態差に関する地域・時代・遺跡間の比較から、製作技術の通時的変化や地域性・階層差を明らかにする研究に取り組んでいる。具体的には、当該ペンダントのレプリカを製作し、レプリカと現地博物館で採集した遺物のシリコンレプリカを観察・比較している。観察の際には、東北アジア研究センターの痕跡学研究所が所有するデジタルマイクロスコープ（VHX-5000）を使用している。このマイクロスコープは、自動深度合成機能が備えられており、観察対象の全面に焦点が合う3D画像の出力が可能である。さらに、超高速画像連結機能により、ミクロレベルの痕跡を一枚の画像の中で捉えることができるため、製作痕跡の分布パターンをより客観的に、また正確に捉えることができる。今年度は、主にペンダントの研磨痕と穿孔部分の観察を行い、個々のペンダントで製作技術が異なっている可能性を示した。

今後は、異なる条件下での実験数を増やし、さらに詳細な製作痕跡のデータベース作成を行いたい。また、3D技術等のデジタル画像解析を活用し、遺物に残された微細な痕跡から工具の同定を試みることで工人を取り巻く先史社会の復元に取り組みたい。

2

1：遺物に施された彫刻の細部を写した顕微鏡写真
2：痕跡学研究所のデジタルマイクロスコープ（VHX-5000）を使用した遺物観察の様子

編集後記

前号での佐藤源之先生に続き、今号では瀬川昌久先生に、ご定年に当たってのエッセイをご寄稿頂きました。私事で恐縮ですが、センターに着任した最初の懇親会で、向かいの席にいらしたのが瀬川先生でした。

コロナ禍で長らく行えなかった親睦行事はいずれ再開できるでしょうが、ウクライナ情勢はロシアの侵攻から一年が経った今も出口が見えません。（後藤章夫）

CNEAS
Center for Northeast Asian Studies

東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第96号

2023年3月23日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009　FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!

ISSN 1344-9095